HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ホロコースト研究の現在 ： ピーター・ノヴィックの集合的記憶とアンデンティティをめぐって
Author(s)	吉田, 徹也
Citation	独語独文学研究年報, 31, 328-341
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26179
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P328-341.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ホロコースト研究の現在

－ピーター・ノヴィックの集合的記憶とアイデンティティをめぐって－

吉田徹也

1. フィンケルスタインとノヴィック

ホロコーストのアメリカ化が語られているなかで、この流れを本流に変えるかのように、ゴールドハーゲン論争以来数年ぶりにホロコースト関連の重要な著作がアメリカ人研究者によって発表された。1999 年にシカゴ大学歴史学教授ピーター・ノヴィック Peter Novick が»The Holocaust in American Life«を刊行し、翌2000年にはニューヨーク市立大学政治学教授ノーマン・フィンケルスタイン Norman Finkelstein が»The Holocaust Industry«を出版し、そのドイツ語版もすぐに刊行された。フィンケルスタインの著作は、「ホロコースト産業」と彼が命名した組織とその活動に対する苛烈きわまる告発の書として、多くの国でセンセーションを巻き起こした。ドイツでもこの挑発的「パンフレット」をめぐって活発な議論が沸き起こったが、とりわけ『南ドイツ新聞』Süddeutsche Zeitung は最大級の特集を組んで専門研究者とジャーナリストによる論戦を掲載した。これについて筆者はすでに論評しているので、ここではその論者のひとりである南ドイツ新聞のペートラ・シュタインベルガーによる反響の要約を参照する [1]。シュタインベルガーによると、フィンケルスタインの著作は 2000 年 7 月に USA と連合王国で出版された。USA では最も怪しげな愚作として扱われたが、連合王国では*ガーディアン紙*や*ロンドンタイムズ*などに大きく取り上げられ、*エコノミスト*では賞賛された。ホロコーストの当事者国であるドイツでの反応はほとんど否定的なものだった。ドイツ・ユダヤ人中央評議会委員ザーロモン・コルンはユダヤ系新聞でこの著作を厳しく批判し、フィンケルスタインがユダヤ人組織、とりわけ世界ユダヤ人会議とユダヤ賠償請求協議会などを、賠償金をゆすり取るためにホロコーストを道具化していると主張したことを批判し、反ユダヤ主義を助長する本を出版したと版元の Piper Verlag を非難した [2]。主要メディアでの扱いは総じてフィンケルスタインに批判的であり、陰謀論者という非難さえ現れた。フィンケルスタインが依拠したのは前年に出版されたピーター・ノヴィックの著作だったが、ノヴィックのホロコースト論のほうは USA では大きな反響を呼び、学問的で興味深い歴史書としておおむね高い評価をえた。ところが彼の著作は、ドイツではフィンケルスタイン論争以前にはほとんど注目されなかったのである。逆に USA ではフ

---

[1] Petra Steinberger: *Verstörungstheorie – Finkelstein und Anstoß: Was bringt die Debatte*, SZ vom 2./3. September 2000

[2] SZ vom 31. August 2000

ィンケルスタインに関する本格的書評は目に付かないという。

こうした反応の違いはそれぞれの国情を反映しているものであろうが、ドイツでのピーター・ノヴィックの評価が、ほとんどスキャンダルに近いともいえるフィンケルスタインへの反応に呼び覚まされるようにして立ち現れてきて、本国同様の肯定的評価をえているのは興味深い現象である。そのノヴィックがフィンケルスタインのテーゼに関しておこなった手厳しい批判もまた注目に値する [3]。ノヴィックによれば、フィンケルスタインのテーゼは次の三点からなっている。第一に、ホロコースト産業を構築して利益をむさぼるユダヤ人エリートの最大の関心事は、イスラエル国家の犯罪的な政策を正当化することである。第二に、ホロコースト産業はホロコーストの記憶を常に呼び覚ますことによってアメリカ・ユダヤ人の右傾化への批判を予防している。第三に、アメリカ・ユダヤ人は自己の資産を増殖させ、アメリカ合衆国の権力中枢に接近するために共謀している。ホロコーストは最高の賭け金をめぐる権力ゲームのチップである。

ノヴィックはフィンケルスタイン・テーゼを「シオンの議定書」のように有害であると断定し、ドイツでは彼の主張が受け入れられることはあるまいとの期待が、FAZ の肯定的評価によって裏切られたことを嘆いた。シュタインベルガーの概括の後にフィンケルスタイン・テーゼを好意的に取り上げるメディアも出てきたのである。その後『南ドイツ新聞』での論評シリーズを基に、増補版『フィンケルスタイン論争』が出版された。

2. ピーター・ノヴィックの『アメリカン・ライフのなかのホロコースト』

ノヴィックは 2001 年に刊行されたそのドイツ語版に「ドイツ人読者のために」という前文を付した。ここで彼は次のようにその著作の狙いを要約している。

ホロコーストという過去との対決においては当然国ごとに大きな相違がある。アメリカの対決とドイツの対決の比較が意味あるのは、相違点と共通性をともに明らかにした場合である。相違点が根本的であるのにたいして、共通性は表面的なものにすぎない。ホロコースト歴史研究コーパスがますます均質化していくのにたいし、ホロコーストの「集合的記憶」は必然的に多様化しており、両者を最初から区別することが重要である。歴史学のコスモポリタン化が進行した結果、いまやホロコースト解釈に関してアメリカ学派やドイツ学派といったものは存在しない。しかしホロコーストの「集合的記憶」に関する事情は異なっている。グローバルで均質的なホロコーストの記憶があると考えるのは間違いである。集合的記憶とは過去に関する情報の集合的収集と伝承だけではなく、むしろ過去にたいする関係の集合的定義・新定義に結びついたものなのである。集団は殺害者、犠牲者、「傍観者」へとそれぞれ歴史的に結びついており、この事実だけからしても様々な集団がかの犯罪にたいする同じ記憶を共有するとか、ホロコーストの均質的記憶が存在する、との主張は無意味になる。集合的記憶には、異なった過去にた

---

[3] Peter Novick: *Offene Fenster und Türen – Über Norman Finkelsteins Kreuzzug*, SZ vom 6. Februar 2001

いする事実としての歴史的結びつきというレベルを越えて、さらに重要な次元がある。記憶の選択である。集合的記憶は、選択され、作り上げられ、周辺化されたり、中心化されたりするが、その基盤にあるのは、記憶が集団にたいして現在どのような目的を果たしうるのか、という決意である。しかし集団内部でも目的は一様ではないので、集合的記憶は絶えず論議の対象となるほかはない。集団的記憶の参照は、未来のビジョンを見据えた現在の道徳的・政治的目的のためにおこなわれるが、こうした目的とビジョンが否定された場合、ホロコーストの参照は「濫用」であり「道具化」となるのである。

アメリカで長い間ホロコーストが問題にされずにおりながら、最近これほどまでに論議されている理由は何か。アメリカでのホロコースト論議の火付け役は主としてアメリカ・ユダヤ人であったが、彼らは第二次世界大戦後の数十年間にはホロコーストの意義を最小化し、続く数十年間にはホロコーストを自己理解と自己表現の中心に据えようとした。ホロコーストは当初はもっぱらユダヤ人だけの問題だったが、アメリカ人全体にとってのシンボル的存在へと発展していった。

この研究はアメリカ・ユダヤ人の生をさらに越えて、そもそもアメリカの生のなかでのホロコーストの役割に関するアクチュアルで公的な議論の展開を跡づけたものである。近年多くのアメリカ・ユダヤ人が批判しはじめたのは、ホロコーストに基づくアイデンティティの強調がユダヤ・アイデンティティの他の多様な基盤を排斥してしまい、そのためにアメリカ・ユダヤ人のもとで「犠牲者意識」が生みだされた、という点である。

アメリカ人はホロコーストの追悼には総じて賛成である。これはホロコーストを意義深いシンボルとして広範に受容したことと解釈できる。と同時に、ホロコースト受容における深刻な対立の欠如は、ホロコーストにはもはや重要性はないとの解釈を可能にする。ホロコースト追悼は、アメリカ合衆国では「努力も要らず、金もかからない」し、なんぴとにも不快感を生むことはない。ワシントンには壮大なホロコースト博物館はあるが、奴隷博物館はない。「ホロコーストはたしかに恐ろしいことではあったが、真に重要なことはベルリンにアメリカ黒人奴隷追悼所を建立することである、とドイツ人が言ったら、アメリカ人はどう思うであろうか」。

ノヴィックはホロコーストを他の受難と比較することを不可欠な歴史研究方法の基礎と考えているため、アメリカ合衆国の負の遺産としての黒人奴隷の扱いを常に引き合いに出すことになる。

3. 序文での問題提起

本来の序文でノヴィックは二つの疑問を提出している。なぜ1990年代になってアメリカ文化のなかでホロコーストがこれほどまでの意義をもつに至ったのか。歴史的出来事はその直後にもっとも論じられて、その後は次第に忘れ去られていくのが常であるのに。ベトナム戦争の映画とベストセラーは戦争終結後の5年から10年の間に現れたし、ワシントンのVietnam Veterans Memorialもこの期間に建造された。ホロコーストの場

合、第二次世界大戦後の最初の二十年間にはほとんど問題にされず、70 年代以降に次第に公共的議論の中心に置き移されていった、それもユダヤ人のもとでのみならずアメリカ文化全体のなかでも。ノヴィックの第二の疑問は、なぜこのアメリカでという場所の問題である。ドイツ、イスラエル、その他の非占領国などと違い、アメリカ合衆国はホロコーストとの直接的なつながりをもっていない。ホロコーストの生存者とその子孫はアメリカ国民の 1 パーセントにすぎず、アメリカ・ユダヤ人のなかでも少数派である。戦後アメリカに渡ったナチ犯罪者はほんの一握りである。今日ホロコーストと呼ばれているものは、大多数のアメリカ・ユダヤ人も含めて同時代のアメリカ国民によってはほとんど認識されていなかった。国民の心を奪っていたのは枢軸国を打ち負かすことであった。

「なぜ今・ここで」という問いにたいして、従来は「トラウマ」説によって答えるのが普通であった。しかし《トラウマ－抑圧－抑圧されたものの甦り》というシェーマは、アメリカ合衆国におけるホロコースト意識の展開の説明としては説得力に欠ける。40 年代終わりにはすすんでホロコースト体験を語ろうとする生存者はいたが、妨げられた。ホロコースト体験がトラウマとなったアメリカ・ユダヤ人もいたことは確かである。しかし史料が語っているのは、多くのアメリカ・ユダヤ人のショックの大きさは《トラウマ－抑圧－抑圧されたものの甦り》というシェーマが発動するには十分ではなかったという事実である。ホロコーストはトラウマとなったに*違い*なく、ホロコースト体験を語ることのできない理由は抑圧に*違い*ない、と単純に想定されたのである。

社会的無意識などという怪しげな実在をもち出さずとも、アメリカ合衆国におけるホロコースト意識の展開を考察することは可能である。その基礎になるのがモーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」である。歴史的研究が複数のパースペクティブから多義的に捉えようとするのとは反対に、集合的記憶はひとつの、自分の関心に引きつけたパースペクティブから考察しようとし、事象を神話的原型に還元しようとする。歴史的意識が過去と現在を峻別するのにたいし、記憶は時の経過を感受せず、対象の現在性に固執して過去性を否定する。集合的記憶は集団についての永遠の内的真実を、たいていは悲劇的真実を表現する。記憶が形成されるやいなや、記憶がこの真実を定義し、集団メンバーのアイデンティティを規定するのである。

集合的記憶といっても、はかない記憶と永続的記憶がある。"Remember Pearl Harbor"などはそのスローガンとしての役割を終えれば放棄される。ユダヤの伝統のなかにある永続的な記憶としてはたとえばエジプトからの脱出や神殿の破壊がある。マサダの自決(紀元 73 年)は二千年の間忘れられていたが、20 世紀のシオニストはマサダをユダヤ人の自己理解に重要であると見なし、新たな集合的記憶が生み出された。機能的な記憶は非機能的にもなりうる。アルヴァックスの方法に拠ると記憶を現在の関心に結びつけることになるが、この関心なるものが何であり、何によって、誰によって規定されているのかが問われねばならない。この関心が、ある時期にはホロコーストの記憶を邪魔者とし、またある時期には歓迎するのである。ホロコーストの記憶の運命の転変

は、主としてアメリカ・ユダヤ人における諸条件の変化、集合的自己理解に関する決断の変化と絡まりあっている。

フロイトは記憶を押し付けられたものとしたが、アルヴァックスは選ばれたものとした。だがこの選択は自由な決断によるものではなく、たとえば冷戦や中東紛争といった特殊状況によって規定されている。さらにアルヴァックスが特に重要視した「記憶の制度化」にも注意を払わなければならない。決断の積み重なりによってホロコーストの記憶を目的とする制度、プロが出現し、ホロコーストに中心的意義を付与する推進力となる。周縁化から中心化にいたるアメリカにおけるホロコーストの歴史は決断の歴史であり、ホロコーストに注意を向けさせる主導権を握ったアメリカ・ユダヤ人がその歴史の中心に位置している。しかしこれはもっぱらユダヤ人の歴史ともいえない。アメリカ・ユダヤ人は第一義的にはアメリカ文化に属している。20 世紀末のアメリカ文化のある特性が、非ユダヤ系アメリカ人がユダヤ人のイニシャティブを受け入れる素地をなしている。ホロコーストに払われている関心は望ましいものなのかどうか。ホロコーストがユダヤ人の自己理解の中心におかれた帰結と、ホロコースト意識の高まりがアメリカ社会にとってもつ意味が問われねばならない。ホロコーストの中心化が進展したコンテクストの主要な要因はアメリカ合衆国で人種平等のエートスが衰退していったことである。このエートスはアメリカ人を結び合わせているものであったが、それがアメリカ人を分断させる特殊なエートスにとって代わられたのである。アメリカ・ユダヤ人のリーダーはユダヤ人を非ユダヤ人から区別する指標を規定せざるをえなくなった。アメリカ合衆国において特殊ユダヤ的なアイデンティティを支えるものは何か。ユダヤ教信仰もユダヤ文化もシオニズムもその支柱とはなりえない。イスラエルの政策はむしろアメリカ・ユダヤ人を憤激させさえしている。しかし、彼らの祖先が移住してこなければ彼らもヨーロッパ・ユダヤ人と運命を共にした、という知識をアメリカ・ユダヤ人は共有している。

集合的アイデンティティと集合的記憶は相補的な関係にある。特定の記憶が中心的であると判定されるのは、それが集合的アイデンティティにとって中心的であるものを表現しているように見えるからである。この記憶が前面に押し出されて、対応するアイデンティティの形式をさらに強固にする。ホロコーストはアメリカ・ユダヤ人の唯一の共通分母として共通シンボルの需要を満たしたのである。「ユダヤの連続性」が失われるのではないかという不安に対抗するのに、このシンボルは適していた。20 世紀末のユダヤのシンボルとして、19 世紀初頭のドイツ・ユダヤ人がTrotzjudentumと名づけたものをホロコーストは促進した。

ホロコースト犠牲者への態度は初期の軽蔑や距離をとる姿勢から暖かい思いやりへと変化した。ハーバード大学の歴史学者チャールズ・メイヤーCharles Maier が「苦情を認めさせる競争」と評した現代アメリカ政治のなかでは、アメリカ全体のアイデンティティにたいして自集団のアイデンティティを優先させる傾向が進展する。ひとつの集団の歴史的な犠牲者の役割の主張は、集団の特殊的アイデンティティの主張にとって中

心的なのである。「犠牲者文化」の成立はアメリカ・ユダヤ人が近年ホロコーストに注意を向けるようになった原因ではないが、重要な条件である。アメリカ・ユダヤ人には 40 年代、50 年代に犠牲者というアイデンティティを回避する理由があり、それがホロコーストを過小評価するという意識的な決断へとつながった。80 年代、90 年代には多くのユダヤ人が「犠牲者共同体」の一員であることを強調するようになった。アメリカ・ユダヤ人はアメリカ社会のなかで最も成功した集団であり、他のマイノリティと比較してもなんら不利益を被っていない。ユダヤ人のアイデンティティをヨーロッパ・ユダヤ人の受難のなかに根付かせることができれば、間接的犠牲者としての地位への権利要求が可能となり、この地位に付随する特権も要求できる。

集団アイデンティティを確立し、犠牲者集団との承認を求める理由づけは論争を引き起こした。争いのもっとも支配的な形態がホロコーストの唯一性への固執である。ホロコーストの唯一性への固執ないしその否定は、知的な不毛そのものである。ホロコーストの唯一性という概念は空虚である。ホロコーストの唯一無二のアスペクトだけを考慮し、他の残虐行為との共通点を無視する、という操作に基づいてホロコーストを比較不可能と宣言することは知的なマジックトリックである。ホロコーストだけが理解と表現を超えた出来事であり、他の大災厄は理解可能で表現しうるとして貶める、屈辱を与える行為である。

さらに、アメリカ・ユダヤ人のホロコーストへの集中はイスラエルとパレスチナ人の争いにおいて独善的態度を要求するという結果ももたらした。中東紛争がホロコースト・パラダイムで考察されたことにより、この複雑な事象に単一の道徳的判断基準が適用されるとともに、イスラエルへのいかなる批判にたいしても敵対的姿勢が助長された。しかし実際には、この問題でホロコーストを振りかざすことは、反ユダヤ主義者とユダヤ・ジャーナリストの対立する主張にもかかわらず、アメリカ合衆国のイスラエル政策に見るべき影響を与えたわけではない。政策を決定するのは何よりもまずリアル・ポリティックスなのである。

ホロコーストをユダヤ人体験の象徴へと祭りあげる現象は、最近のアメリカ・ユダヤ人に顕著な内向き・右向きの傾向と結びついている。シンシア・オジック Cynthia Ozick は「全世界がユダヤ人の死を望んでいる」と主張したが、それではユダヤ人は他者と関るべきではないことになる。ここでも原因と結果がないまぜになった複雑な事象が問題となっている。それでも、アメリカ・ユダヤ人の思考に占めるホロコーストの中心的位置は、ホロコースト中心化以前のアメリカ・ユダヤ人の特質であった豊潤な社会意識を蝕んだと言わざるをえない。ホロコースト追憶はユダヤの伝統に根ざしたことでもある。しかし現在の儀式は、ホロコースト生存者の神聖化に見られるようにあまりに非ユダヤである。

結局ユダヤ人が、多数派である非ユダヤ・アメリカ人にどのような姿を見せているのか、あるいは見せたいのかという問題が残る。ワシントンのホロコースト博物館とユダヤ

人組織が支援する教育カリキュラムから浮かび上がるユダヤ人像は、ユダヤ人イコール犠牲者という等式である。ユダヤ人の自己理解と他者のユダヤ人理解がともにホロコーストの中心化によって決定されることを望むのであれば、「それはユダヤ人にとっていいことなのか」と問わざるをえない。

人口の 2、3 パーセントであるユダヤ人側からのホロコーストとの関わりが、アメリカ社会全体に拡大していった理由は多数存在する。その一つだけを挙げれば、ユダヤ人がアメリカのメディア世界と世論操作のエリート層のなかで果たしている役割の重要性がそれを不可避にしたのである。

アメリカがホロコーストと対決しなければならないのは、ホロコーストが貴重な教訓を含むからである、との理由付けがなされるのが常である。右翼、保守派、左翼、リベラル、中道のそれぞれが別々の教訓を提示してきた。たとえば中道にとってホロコーストは道徳的な定位基準点となる。エスニシティやイデオロギーで分裂を極める世代ではアメリカ人として共有できるものは何一つないが、ともにホロコーストを悼む可能性だけは残っている。愚鈍きわまるホロコースト否定論者たちでさえも、この消極的なコンセンサスに依拠しているのである。「ホロコーストが起こったのであれば、我々も追悼するであろう。だがそれは起こらなかったのだ」と。またホロコーストを引き合いに出してアメリカの生活様式を称揚することで、ナショナルな意識の高揚に利用されもするのである。ホロコーストから教訓を引き出そうとする試みは的外れである。

ホロコーストの唯一無二性の主張の意味はドイツとアメリカでは全く異なっている。ドイツでは、この主張があの過去の歴史との対決という難行からドイツ人が逃避することを阻止するのに役立っている。最近ドイツでは、ホロコーストの相対化への異議申し立てが多くのドイツ人によってなされたが、コール率いる CDU がホロコーストの否定を規制する条項を法律化したこともこのコンテクストに連なる。ここでは「相対化」がドイツ人にたいする犯罪をドイツ人の犯罪と同一視することを意味した。ホロコーストの唯一性に固執し、相対化を非難したドイツ人は、過去との対決からの逃避につながる布石を妨害しようとしたのである。ところがアメリカ合衆国においては、ホロコーストの唯一無二性を同じように主張すればその機能は正反対のものとなる。それは道徳的・歴史的責任からの逃避という結果につながるのである。黒人やインディアンたちになされたことはホロコーストと比較すればかすんでしまう、という主張は正しく、かつ逃避なのである。黒人奴隷史という過去との対決には金がかかるが、ホロコーストとの関わりは涙ですむ。ホロコーストはアメリカ的記憶である、という主張には歴史的責任の概念を軽視する狙いがある。「ホロコーストの記憶という点で我々が今いるところにどのようにして来たのであろうか，我々は今いるところにとどまりたいのであろうか」

4. 結論

最終章でノヴィックは、ホロコースト追悼はアメリカ人にとって儀式化された悲しみで

しかないことを指摘し、次のように結論付けている。アメリカ社会に及ぼしたその大きな影響にもかかわらず、ホロコーストは厳密な意味ではアメリカ人の集合的記憶を形成していない。歴史的出来事が集合的記憶のなかに深く根づくには、「自分たちは誰であるのか」を集団に思い起こさせる、集団を定義する力をもつことが必要である。ホロコーストはそれを満たすにはあまりにアメリカ人の経験から遠く離れている。人口統計学上の変化はその傾向をさらに強めるであろう。ホロコーストはアメリカの合意可能なアイデンティティに結びつくものではありえないが、記憶に関しては異論の余地なく合意がなされている。これがホロコーストによってアメリカ人の集合的記憶が本質的にはつくり上げられない理由の一つである。なぜなら、歴史的事件が集合的記憶に根づくもう一つの可能性が、その事件が持続的対立の枠組みを結果することだからである。フランス革命はその後 150 年間にわたって激しい戦闘をともなう政治的境界線をもたらした。イスラエルでは、ホロコーストは集合的アイデンティティと塹壕戦の枠組みの源泉であった。ドイツでは、ホロコーストの記憶にたいする態度が政治的・イデオロギー的・世代的対立を反映している。フランスではホロコーストは人種主義と外国人憎悪をめぐる持続的論争と結びついている。ポーランドにおいては、ホロコーストは教会反動勢力とリベラル近代化論者との文化的対立の試金石となっている。

ホロコーストの記憶の政治化が嘆かれている。しかし本来その名に値する集合的記憶は政治的戦いの舞台であり、これが、集合的過去の中心的シンボルと、過去にたいする集合的関係に関して競合しあう物語が戦い合う場なのであり、このせめぎあいによって集合的現在が定義されるのである。合衆国では、ホロコーストの記憶はそもそもこれを記憶と呼ぶこともできないほどに無意味なものになってしまっている。その理由は、ホロコーストの記憶が誰もこれに異論を唱えず、またアメリカ社会内部の現実の境界線と重なり合っていない、つまり非政治的なものだからである。

アメリカのほとんどの非ユダヤ人はホロコースト論議の消費者であって、生産者ではない。ホロコーストがアメリカ文化のなかに受け入れられたのは、ホロコーストがアメリカ・ユダヤ人の自己理解と自己表現のためにかちえた重大な意義の副産物、ないしそのオーバーフローといっていい。ホロコーストの記憶がアメリカ人一般に及ぼした影響はきわめて小さいが、アメリカ・ユダヤ人の意識におけるホロコーストの中心的位置の影響力は人を不安にさせるほど途方もなく大きい。これにはアメリカ・ユダヤ人の決断が関わっている。合衆国におけるホロコーストの記憶の展開はアメリカ・ユダヤ人がこの記憶をどう取り扱うかについての一連の決断の帰結である。実際には決断はユダヤ人の代表者によってなされ、その選挙人によって沈黙のうちに承認されてきた。ユダヤ人代表者たちは 60 年代中葉まではホロコーストを軽視していた。それは、ホロコーストの強調がアメリカ・ユダヤ人の利益にならないと判断されたからである。過去にではなく未来に定位し、民族的差異を認めさせるのではなく抑圧することのなかに支配的なエートスを反映させたのである。この時代のアメリカ・ユダヤ人指導層は、宗教とイスラエルにではな

く統合と普遍主義に定位していた。もちろんこの、できるかぎりホロコーストについては話さないという決断への批判者もいたが。

最近の25年間にアメリカ・ユダヤ人指導層は、ホロコーストに中心的価値を認める決断を下した。「新しい反ユダヤ主義」なるものに立ち向かい、孤立したイスラエルを支援し、よみがえった民族的意識を根拠づけるために。この決断が下されたコンテクストである文化は、もはや民族的差異を蔑視せず、むしろ民族的差異を称揚し、犠牲者のステータスを高める文化であった。重大な決定を下した指導者たちはその選挙人よりも特殊主義的であり、宗教的であり、イスラエルよりであった。最近この指導者たちの決定への批判者が、ホロコーストの倒錯した神聖化を嘆き、「最大の受難者」としてのステータスを求め、多くのユダヤ人がホロコーストを誇りにさえ思うという見せかけをつくり出そうとすることに異議を唱えた。この批判者のなかにノヴィック自身もいる。

ひとたびある目的のために投入された記憶は、自己規定の持続的な構成要素となりうるし、我々にただ単に過去について何かを語りうるばかりではなく、現在我々は何者なのか、そして未来から何を期待しうるのかについても語りうる。もっとも強力な集合的記憶は通常深い不満を表現している。それゆえに我々は集合的記憶に固執しているのである。しかし我々がそれをとらえれば、あるいはそれが我々をとらえれば、その結末は怪しげなものとなりかねない。ユダヤ人の記憶だけが特別なのではないのである。「ユダヤ人がヒトラーの犠牲者を忘却するようなことがあれば、ユダヤ人はヒトラーに死後の勝利を得させることになる」とのエーミール・ファッケンハイム Emil Fackenheim の言葉はある意味で正しい。ホロコーストをユダヤ人の経験のシンボルと定めることによって、ユダヤ人は侮蔑すべきパーリアであるとのヒトラーの定義を受け継ぐようなことがあれば、ヒトラーの死後の勝利はさらに大きなものとなろう。過去と同様に未来においても、ホロコーストの記憶に関して我々が下す決断に状況の変化が影響を及ぼすことになる。状況が決断を促すにしても、決断の責任は我々にある。

5.『アメリカン・ライフのなかのホロコースト』の概括

ノヴィックの著作はアメリカン・ライフと集合的記憶の綜合的研究なので、その内容を正確に総括することは不可能に近いが、ベルリン大学歴史学教授ラインハルト・リュールプの『ツァイト』への寄稿文を参考にしながら、ノヴィックの時間軸に沿った歴史記述の最も重要な論点を概括してみよう[4]。

アメリカ合衆国におけるホロコースト意識は連続的に形成されたものではない。第二次世界大戦後の20年間には、60年代終わりからつくり上げられていったホロコースト概念もなければ、ヨーロッパ・ユダヤ人の殺害とその現代にとっての意味に関する公の

---

[4] Reinhard Rürup: *Holocaust – Umkämpfte Erinnerung. Zum Umgang mit dem Holocaust in den Vereinigten Staaten: Über Norman Finkelsteins Pamphlet lohnt der Streit nicht, wohl aber über das wichtige Buch von Peter Novick,* Die Zeit 07/2001

議論もなかった。アメリカ・ユダヤ人指導層はむしろ、ホロコースト生存者たちの沈黙を求めた。いわゆるアメリカ・ユダヤ人の「黄金時代」には全合衆国市民の共通性が目標とされたのである。ナチ時代のトラウマ的体験の強調はその阻害にしかなりえなかった。生存者はユダヤ人社会のなかで尊敬されず、彼らの体験にも関心がもたれることはなかった。「需要」の高まりに応じて「供給」も高まるのは30-40年後のことである。これに対応してアメリカ世論においてもホロコースト犠牲者としてのユダヤ人は特別な役割を果たすことはなく、多くの犠牲者集団のなかの一つに過ぎなかった。

1961年4月から開始されたアイヒマン裁判とハナ・アーレントを中心とする論戦、さらにロルフ・ホーホフートの『神の代理人』のブロードウエーでの上演などが、60年代にホロコーストに関する公の議論を始めさせた。また、イスラエルではヘブライ語のショアーの英語訳としてとうに使われていたホロコーストという概念も今日の意味で通用し始めた。イスラエルは60年代半ばまでアメリカ=ユダヤ意識のなかで大きな役割は果たしていなかったが、1967年の六日戦争(第三次中東戦争)、さらに73年の十月戦争(第四次中東戦争)で状況は一変する。脅威にさらされるイスラエルを前にしては、ホロコーストは過去の歴史ではなく、恐怖をかきたてる未来の姿であると認識された。イスラエルがもはや不敗とは思われなくなったことにより、ユダヤ人の傷つけられやすさという意識が甦った。反誹謗同盟 ADL などの主要ユダヤ人組織は、ホロコーストの記憶が薄らいだことがイスラエル危機の決定的な原因であるとして、ホロコースト・プログラムが必要との結論を打ち出した。

人種の坩堝という社会・文化的条件下でのアメリカ・ユダヤ人の「黄金時代」には、ユダヤ人のアイデンティティも急激に失われていったため、アメリカ・ユダヤ人の存続そのものが問題とされ始めた。ユダヤ的生活形式の終焉を意味する「静かなるホロコースト」、「精神的ホロコースト」が囁かれもした。同時にこの時代には新しいエスニシィティ・コンセプトがアメリカ社会に浸透し、個々の住民集団の特殊性が肯定的に評価され、合衆国市民のアイデンティティに集団アイデンティティが肩を並べるようになった。ユダヤ人アイデンティティ政策は有利な状況におかれ、戦後長く否定されてきた「犠牲者のステータス」がアメリカ・ユダヤ人に受け入れられていった。ホロコーストの記憶が、激しく分裂したユダヤ住民の意識をまとめあげる最大の共通項として、新しいユダヤ人意識の形成の基盤となった。

70年代終わりからは、ホロコーストの記憶がユダヤ人にとってだけではなく、アメリカ社会全体にとって必然的なものとなった。ホロコーストが一般的アメリカ人の意識に浸透していった最大の契機は、1978年の『ホロコースト』のテレビ放映である。この時以来、合衆国大統領はホロコーストの記憶を保ち続けるよう要請するようになった。ハイスクールと大学ではホロコースト授業が導入され、ホロコースト博物館などの施設が増加し、大学でのホロコースト講座も増え続けた。1978年にカーター大統領は、イスラエル建国30周年を記念してホロコースト博物館の建設を表明、93年に開館した。

すでに序文でも明確に述べていたように、ノヴィックはホロコースト意識の神聖化に批判的な姿勢を示しており、その後の叙述のなかでもその姿勢を貫いている。ノヴィックはエリ・ヴィーゼル Eli Wiesel への敬意にいささかも欠くところはないが、彼のホロコースト概念に対しては厳しく論難する姿勢を崩すことはない。エリ・ヴィーゼルは、ホロコーストを「決して理解できず、決して表現できない神秘」と定義したが、歴史学者としては史料批判に基づく分析と比較によってこうした神聖化を突き崩すことが課題となる。ユダヤ人のアイデンティティはホロコーストの記憶だけによって形成されてはならない、とのノヴィックの主張もこうした分析に基づいたものである。ホロコーストの唯一無比性のテーゼはユダヤ人アイデンティティを緊箍のように締め付けかねないことを恐れているからである。と同時にノヴィックは、ユダヤ人であること、それもアメリカ・ユダヤ人であること、そしてアメリカ合衆国市民であることのポテンシャルを自ら汲みつくすことを望んでいるようにも見える。

リュールプは、ノヴィックの著作はドイツ人読者にとっても新しい知見と情報の宝庫であると高く評価するとともに、1945年以降のドイツ史にとっても、ホロコーストの社会的取扱いについての、原資料を駆使した包括的な叙述が提供されることを望んでいる。

6. ホロコーストの唯一無比性と普遍主義

ノヴィックはフィンケルスタインの学問的研究方法そのものを厳しく批判しているが、TAZ とのインタビューのなかでホロコーストの記憶の道具化というフィンケルスタイン・テーゼの核心部分について次のように述べている。

> （記憶は選択されるとあなたは主張しています、しかし道具化という言葉は使わないのですか、との問いに答えて）フィンケルスタインと私は、記憶の問題に同じようにアプローチしていると考える人もいるようですが、これほど間違っていることもありません。彼はホロコーストの、純粋で、正しい、真実の記憶があると信じています。だからこそ彼にとっては、記憶を濫用し、自己の目的のために改竄する人々が存在するのです。こうした態度から、結局彼は、自らが反駁しているホロコーストの唯一無比性テーゼの原理主義的擁護者と同じ陣営にいるのです[5]。

フィンケルスタイン自身は、ホロコースト意識の神聖化とアメリカ・ユダヤ人組織のユダヤ・アイデンティティ形成への決断にたいするノヴィックの批判を、まさに自己の主張の後ろ盾として正義の仮面をつけた収奪者に立ち向かったつもりであったろう。しかしノヴィックとフィンケルスタインのあいだには越えられない溝があった。

さらに、ノヴィックとフィンケルスタインを別な観点から批判するドイツ人研究者もいる。

---

[5] *„Warum nehmt ihr Deutschen Finkelstein überhaupt ernst“*, Interview: Brigitte Werneburg, TAZ Nr.6368 vom 9.2.2001

フランクフルト・ホロコーストの歴史・影響のための研究資料センター長ミヒァ・ブルムリクは次のように主張している[6]。

集合的記憶の構成的性格を指摘したとしても、その真理内容や価値について何かを述べたことにはならない。ノヴィックも含めて、アメリカにおけるホロコースト意識の成立過程の論者は、この過程の評価にあたって認識の問題と真理の問題を混同している。ノヴィックとフィンケルスタインの道徳理論的仮定を見れば、世界史と同時代史の考察はただ単に心性史的問題ではなく、道徳的普遍主義というもっとも困難な問題であることが明らかになる。ノヴィックは、ベルリン奴隷犠牲者追悼施設をホロコースト追悼施設に対置させているし、フィンケルスタインはホロコーストへの集中がインディアンに対するアメリカ合衆国の絶滅政策の実行から目をそらせている、と主張している。二人とも道具化という道徳的に重要なテーマを中心に据えているが、フィンケルスタインのほうが徹底している。彼はノヴィックと違い、世界史的犠牲者との取り組みが道具的にならざるをえないとは考えていない。ノヴィックは、追悼もふくめてすべての行為は特定の目的に奉仕する、というアメリカ合衆国に根づいているプラグマティックな姿勢を共有している。

ノヴィックはホロコーストの唯一無比性テーゼには抵抗している。しかし、追悼の政治的道具化を批判しはしない。それは、追悼がある目的に利用されることは不可避であるとの彼の信念に基づく。中絶反対論者が堕胎された胎児をショアーの犠牲者と同一視することもノヴィックの気には障らず、その結果、世界史的記憶の洞察効果に懐疑的な姿勢が生まれる。これでは歴史研究の意味と目的は自己自身のうちにしかなく、その傷つきやすさをもとにした人間の尊厳の本質へのより深い洞察のための教訓が排除されてしまう、とブルムリクは論難する。

ブルムリクによれば、まさにこの人間の尊厳を傷つけることにおいて、世界史上ショアーを凌駕するものはない。それは、ショアーによって道徳的な意味で世界史の評価のための否定尺度が与えられたからである。人権の制度化と擁護の根底にあるのがこの尺度である。ノヴィックの歴史主義とフィンケルスタインの殉教主義は道徳的懐疑主義で交わっている。

ブルムリクは、彼らのホロコースト論は道徳的普遍主義を強化するように見えるが、迫害されたマイノリティへの政治的加担であり、こうした連帯への意志は歴史的経験の恐怖に対抗することはできない、と批判している。

ブルムリクの拠って立つ前提が一切明らかにされていない以上、このリゴリスティックな批判をさらに批判することに意味があるとは思われないが、「迫害されたマイノリティ

---

[6] Micha Brumlik: *Die Graduierung des Grauens. Instrumentalisierung und Singularität: Zu den geschichtsphilosophischen Hintergründen der Debatte um die Buchveröffentlichungen von Peter Novick und Norman Finkelstein.* Newsletter zur Geschichte und Wirkung des Holocaust, Nr.20, Frankfurter Rundschau vom 20. Februar 2000

への政治的加担」が道徳的普遍主義に違背し、「連帯への意志」が歴史的経験の恐怖に対抗できないのであれば、我々の市民的政治活動には一切意味がなくなるであろうし、歴史的・政治的研究の道徳的基礎そのものも危うくなる。ここで特徴的なのは、ブリムクにおいてはショアーが道徳の絶対基準と化しており、そのメタファー的な転用もこの基準からの逸脱として絶対経験の尊厳を侵犯することにならざるをえない、という事実である。アメリカ流のプラグマティズムを忌み嫌い、認識と真理を分離することに固執するかぎり、ブリムクは今まさに求められている、特殊主義とあい補い合う普遍主義から遠ざかるだけであろう。

戦争の記憶と日米関係を記憶の共有という視点から論じた近著『記憶としてのパールハーバー』の第15章で、入江昭は次のような指摘をしている。

チャールズ・メイヤーCharles Maier はドイツ人の記憶とホロコーストについての著作で、ドイツの国民的アイデンティティ形成には、ホロコーストの記憶が重要であると指摘している。国民的アイデンティティは国家が歩んできた過去について一貫した見方を基に形成されるが、メイヤーはこの一貫した見方を作り上げる要因は多様であることを示している。ドイツの保守派はホロコーストをナチズムという特殊状況の産物としてとらえ、ドイツ的なものとは本来相容れない非ドイツ的なものとする。ハーバーマスのような急進派は、ホロコーストは近代ドイツ史の切り離すことのできない一断面であり、さらにすすんで、ドイツ人としてのアイデンティティのなかにホロコーストの記憶を取り込まなければならないと主張する。

さらに入江は、アメリカの歴史的記憶形成について、アメリカ国民は奴隷制や人種差別のような過去の汚点を直視し、それを全体的記憶のなかに統合しようとしてきた、とかなり肯定的評価を下す。

次に入江は、メイヤーやハーバーマスは「国内の合意形成という文脈で」記憶を論じてきたが、国境を越える記憶やアイデンティティはありえないか、集団的アイデンティティのひとつとして地域的、そしてグローバルなアイデンティティは可能か、と問うて次のような仮説を提示する。

> 少なくとも、「人権」あるいは「人道」に対する罪、といった概念は、すべてのものは人類としてアイデンティティを共有することを前提としているのだ、といえないだろうか[7]。

現在グローバリゼーションのなかでのホロコーストの普遍化が進行しようとしている。そしてその萌芽はすでに明瞭に存在している。入江によれば、文明によって規定されていたアイデンティティが今日ではグローバリゼーションによって支えられている。そし

---

[7] 入江昭『記憶としてのパールハーバー』, 425頁

てグローバリゼーションとは、われわれがみな「文化的に相互連関する世界」に生きているという概念なのである。ブルムクによれば、傷つきやすさをもとにした人間の尊厳への洞察こそが凌駕しえぬかの世界史的出来事からの教訓である。しかしそれは、より普遍的なアイデンティティ形成という文脈におかれたときにはじめて、その言葉にふさわしい真理価値をもちうるであろう。20世紀を刻印する出来事も、21世紀にはナショナルなまとまりを超えて共有された記憶のなかで、グローバルな人権政策の基礎となりうるのである。ノヴィックは「グローバルで均質的なホロコーストの記憶」は存在しないと主張したが、他のいくつもの文化分野に浸透しつつあるグローバリゼーションの過程が示しているように、特殊的な記憶構造と普遍的な記憶文化の相互作用が発展していくことに疑いの余地はない。ホロコーストの記憶に関する厳密な論証に基づいて展開されたノヴィックのホロコースト論は、その当初の意図を超える大きな広がりのなかで受けとめられていっており、ノヴィックの著作そのものがそのアメリカ・ユダヤ人社会という特殊へのこだわりによってホロコーストの普遍化という可能性を切り拓く卓抜な実例となっているのである。

【参考文献】

Finkelstein, Norman G., 2000, *The Holocaust Industry - Reflections on the Exploitation of Jewish Suffering.* Verso Books, London/New York. Dt.Übers.: *Die Holocaust-Industrie - Wie das Leiden der Juden ausgebeutet wird.* 2001, Piper Verlag, München.

Levy, Daniel, Natan Sznaider, 2001, *Erinnerung im globalen Zeitalter: Der Holocaust.* Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.

Novick, Peter, 1999, *The Holocaust in American Life.* Houghton Mifflin Company, Boston/New York. Dt.Übers.: *Nach dem Holocaust - Der Umgang mit dem Massenmord* . 2001. DVA, Stuttgart/München.

Steinberger, Petra (Hg.), 2001, *Die Finkelstein-Debatte.* Piper Verlag, München.

細谷・入江・大芝編(2004):『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房。

吉田 徹也(2002):「ホロコースト産業批判をめぐってードイツメディアにおけるフィンケルスタイン論争」,(橋本・江口編:『新・ドイツ語圏研究(2)－異文化研究のパースペクティブを語る－』国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 50、北海道大学)

(北海道大学言語文化部・大学院国際広報メディア研究科教授)